日本聖公会
ウイリアムス神学館ニュース
2021年
第108号
The Bishop Williams Theological Seminary NEWS
日本聖公会京都教区
発行・編集人：黒田 裕
〒602-8011
京都市上京区桜鶴円町380
TEL：075-431-5406
FAX：075-431-5445
williams@muc.biglobe.ne.jp

コロナ禍に想う

司祭　浦地　洪一

昨年の二月三日、クルーズ船が横浜港に入港し、二月十三日には、日本国内で初めてのコロナ・ウイルス感染者が死亡したというニュースが報じられて、もう早一年になります。

各地で緊急事態宣言が出され、毎日、「三密」を避ける、「不要不急」の外出を自粛することが求められています。

教会でも、昨年のイースター頃から、それぞれ、いろいろな対策を取ってきましたが、いよいよ、主日礼拝をはじめ、集会や行事の休止に踏み切ることになりました。

私たちは、今、大変な時代を生きているのですが、一方で、私たちの教会はこれで良いのか、主日礼拝とは、そんなものなのかと問われているような気がします。

とくに、日曜日の主日礼拝について考えると、礼拝に出席することが、私たちにとって、ほんとうに「不要不急」の行動になるのでしょうか。

主日礼拝とは何か。主日の聖餐式とは何かということを、もう一度問うてみる必要があるのではないでしょうか。

祈祷書一五九頁のルブリックには、このように記されています。「聖餐は、主イエス・キリストがお定めになった感謝・賛美の祭りであり、教会はこれを主からの賜物として受けた。わたしたちはこれを行うたびに、主が再び来られるまで十字架の犠牲の死と復活、昇天、聖霊降臨を記念し、キリストの命に養われ、主の救いのみ業を宣べ伝えるのである。」

私たちの魂は、パンとぶどう酒、すなわち、キリストの肉と血によって養われているという信仰を持って生活しています。それを、「休止します」という言葉で、簡単に納得し、当然としてしまっている自分に、自問自答を繰り返しています。

今、世界中を揺るがすコロナ禍の中で、主日礼拝とは何か、聖餐式とは何か。イエスさまが、今、ここに居られたら、何と言われるだろうか。

何の痛みも感じないで、この事態を受け入れるならば、主日礼拝出席の大切さや、聖餐式の意味を教える立場として、信徒の方々に、どのように説明すればよいのでしょうか。

（うらぢ こういち 本館教授 法憲法規）

道を伝えて

個性的な定義で知られる国語辞典として、『新明解国語辞典』（三省堂）があります。第八版で「みち」を引いてみると、最初の説明に出てきたのがこのような定義でした。「地面のうち 人や動物が往来を繰り返すうちに踏み固められた、ある幅を持つ長いつながり」。これは「けものみち」のようなイメージでしょうか。しかし、キリスト教が語る「道」もまさにこれかもしれません。「人…が往来を繰り返すうちに踏み固められた」とは、まさにキリスト教の成立過程と言えます。キリスト教は最初から定まった教えがあったわけではありません。さまざまな人たちがいろいろと考え、また悩み、神の声を聞きながら「踏み固め」てきたものです。それは決して狭量なものではなく、「ある幅」を持っています。教会の中に見られる多様性こそがその「幅」でしょう。そしてキリスト教は二千年という「長い」時間をかけて伝えられてきました。その間にも、改めて「踏み固められた」地が生まれ、幅が生まれてきたのです。私たちは数えきれない先達たちが踏み固めた道を歩いています。そして今を生きる私たちもまた、「道」を踏み固める一人です。その道を、次の誰かが歩くのでしょう。誰もが日々、道を創り出しています。

「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」（高村光太郎）

（前川 裕 まえかわ ゆたか 本館教授 新約学）

同窓会通信

1995年にウイリアムス神学館に入学し3年間学びと生活を学校関係者の皆様、教会実習時の各教会牧師様・ご家族の皆様・信徒の皆様にお世話になり深く感謝申し上げます。おかげさまで何とか現在奉仕職の道を歩ませていただいております。

神学生の頃、実習教会で「なぜ京都教区は他教区の神学生に親切にしてくださるのでしょうか？京都教区に残らず自分の教区に戻ってしまうのに」という私の問いに「あんなぁ、わたしら、関ヶ原から向こうのことは、よう知らんねん。だから横浜教区とか言われてもわからへん。多分一生行くこともないし向こうの人と会うこともない。でもなあ同じ聖公会のとこから神学生さんが来はったんや。嬉しいやん。そんなら一生懸命お世話焼くやん。ええか、あんたが向こうに帰ったら、ええ牧師さんになってくれたらうちらは嬉しいんや。それでええんや」との答えを信徒の方から伺いました。

またキリスト教倫理の授業の際「自分は理想ばかりを書いてしまうからダメですね」と言った私に、「理想を言うのが牧師だよ。たとえ周りの牧師や信徒に全否定されても理想を語り続けるのが牧師。そこに教派は関係ないよ。」との言葉を教授からいただきました。

恐縮ですが以上のことは、これまで何度も私を立ち止まらせ歩みなおしをさせてくださったものでした。改めて心から感謝申し上げます。

（司祭 宮崎 仁 みやざき ひとし
横浜教区 逗子聖ペテロ教会牧師）

観想的なひとへ

館長 黒田 裕

この春から米国ヴァージニア神学校で日本に居ながらにして学びを深める機会が与えられています。自己の研鑽はもちろんのことですが、想定外だったのは神学教育の全体に関わる気づきが与えられていることです。

ご存知の通りウイリアムス神学館は「道を伝えて己を伝えず」を教育理念として掲げ、祈り、学び、生活を三本柱としてその教育を進めてきました。さらに日々の礼拝は「神学館における神学教育を根底から支える最も大切な行為」（履修要項5頁）とされています。こうした諸原則を、いま学んでいる霊性神学を通して眺めると、さらに躍動的・統合的にこれらが浮かびあがってくるのです。

例えば、神学校が養成しようとする人間像を上記のような視点からみると「観想的なひと」ということができます。観想（コンテンプラチオ）とは、伝統的に修道院の中で実践されてきた瞑想の過程である、レクチオ（読書※もちろん一義的には聖書です）→メディタチオ（黙想）→オラチオ（祈り）の最終段階にあたるもので、神と人との神秘的な合一を意味します。恋人たちが沈黙のうちに見つめ合うように、人と神とが対面する至高の愛の状態といった表現をする研究者もいます。いずれにせよコンテンプラチオとは、「観」という漢字があてられている通り、〝みること〟に関係し、かつ、言語としてまとまった形をもった祈りとは異なる祈りということができます。

一方、観想の新たな洞察として半世紀ほど前に（日本語で一言に翻訳するのは難しいので原文のまま表記しますが）、"A long, loving look at the real" という表現が登場してきました。継続的・永続的に霊的な小径を歩みつつ、神さまの愛のうちに、〝ほんとうのこと〟を見つめる、という意味合いがあります。そして、この "the real" には、神さまと神さまにおける現実はもちろんのこと、神さまとの関係における真の自己（祈りに集中できない自分や傲慢な自分、欠けのある自分や傷ついた自分も含まれます）や、他者との連帯性における自己といったかなり広がりのある現実性が含意されています。また、そこにおいて、現代の霊性神学は、ある種の自己覚知あるいはアン

ガーマネジメント（怒りの感情と上手につきあう心理トレーニング）をも時に射程に入れています。さらには、この観想は、聖書や諸現実の神学的解釈と軌を一にするがゆえに、この次元において日々の礼拝と神学諸科との総合の契機をも有しているのです。

以上を踏まえて神学教育の全体像を言いあらわしてみます。まず神学校生活全体を、教会奉仕者になることに向けた霊的な旅のはじまりと捉えます。そこでは祈りと学びと生活を通して観想的なひとへと涵養されることが期待されます。その経路は、「道を伝えて、己を伝えず」の径であり、それはまたくりかえし同じ場所を通るよう（スパイラル）に見えつつ、全体としては聖餐式がヴィジョンとして提示しているような「み子が再び来られるまで」（祈祷書175頁）続く終末論的な方向性を持っています。そうした霊的な旅はまた、ヴィア・メディアの途であり、両極のどちらに組することなく、それらを越えた先に真理を見出し、両極を和解的に橋渡しする使命を帯び、神との関係において他者と連帯する道行きということができます。

間もなくウイリアムス神学館の2学期が始まろうとしています。机上の空論で終わらないよう、神学生たちや同労の友と協力しながらこれらのコンセプトが受肉化するよう努力してまいりたいと思います。そのためには皆さまのご助力を欠くことはできません。今後ともウイリアムス神学館をおぼえ、ご加祷とご支援の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

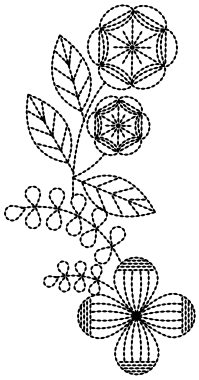
（※本稿は昨秋発行のBSAニュース『VISION 172号』巻頭言から、許可を得て転載させていただきました。）

（くろだ ゆたか 本館館長）

教会刺繍の会のお引越し

もう一年ほど前のこととなり「ニュース」とはいえなくなってきていますが、これまでもニコルス館を会場の一つとして使っておられた「教会刺繍の会」が、昨春、定住教役者が不在となったことをきっかけに、本拠としていた桃山基督教会からウイリアムス神学館に引っ越して来られました。今年度はコロナの影響で休会となることも多いのですが、月に一度の集まりには8名ほどのメンバーがピューリフィケーターなどのリネン類からフロンタルなどの絹のものまで、さまざまな聖布類を手掛けておられます。針・絹糸・麻布・絹地といった、それぞれの専門店も本館からはアクセスが良く、皆で連れだって買い物にも行ける好立地ということが後になって分かった利点のひとつだそうです。作業の合間に神学生のキャソックの補修もしてくださっています。何かとお世話になりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（編集部）



神学館で聴講しませんか。

期末試験やレポート提出、成績評価なしで受講できます！

毎年行われていますウイリアムス神学館の聴講制度。主な対象が聖公会信徒であるのはこれまでと変わりませんが、「館長の許可」により他教派の方々も聴講頂けるようになっています。しかも、試験やレポート、成績評価もその方の申し出に応じて、つまり任意で受講可能です。

【来年度の開講科目と担当教員】

教会史（岩城聰／大阪教区司祭）、英書講読（黒田裕／京都教区司祭・館長）、旧約入門（勝村弘也／神戸松蔭女子学院大学名誉教授）、新約入門（前川裕／関西学院大学准教授）、旧約神学（勝村弘也）、新約釈義（嶺重淑／関西学院大学教授）、教理学Ⅰ（岩城聰）、教理学Ⅱ（濱崎雅孝／関西学院大学ほか非常勤講師）、聖公会論（林和広／神戸教区司祭）、礼拝学Ⅰ（越川弘英／同志社大学教授）、礼拝学Ⅱ（林和広）、教会音楽（辻彩乃／大阪教区・信徒）

聴講料は1科目45,000円（年額）、詳しくは各教会にお届けしています聴講案内をご覧いただき、メール、ファクスまたは郵送でお申し込み下さい。

申込締切は4月10日（土）必着です（〆切が迫っている時は電話でも結構です。後日申込書をご持参下さい）。時間割は下記の通りです。

	9:00-10:25	10:35-12:00	13:30-14:55	15:15-16:40
火				英書購読
水	教会音楽	礼拝学Ⅱ	聖公会論	
木			旧約入門 教理学Ⅰ 教理学Ⅱ	教会史 旧約神学
金		礼拝学Ⅰ		
土	新約入門 新約釈義			

2021年度の「今さら聞けない!?」講座は「新約思想編」です。

残念ながら昨年度は中止となりました「今さら聞けない!? キリスト教講座」「新約思想編」（講師・嶺重淑先生）。2021年度は、昨年度開講できなかったものと同じ内容でお送りします。

「本講座では、『愛』『共生』『祈り』『奉仕』等の主要な倫理上の主題を取り上げ、関連テキストの講読を通して、共に学びを深めていきます。」（講師より）

「すべては神の御心」なら、どうして祈る必要があるの？ 献金と募金はどこが違うの？ キリスト教の教えの中心である「愛」の本来の意味は？ といった素朴な疑問や質問をたずさえて、どうぞ今年もご参加ください。もちろん今回もネット受講は随時申込を受け付けています。申込締切は4月22日（水）です。詳細はチラシほかHPにも掲載しています。

【日時】年10回
土曜日：午後2時～午後3時30分
4/24, 5/22, 6/26, 7/24, 9/18, 10/23, 11/27, 1/22, 2/26, 3/26
【場所】ウイリアムス神学館・大教室
【費用】①教室受講コース：8,000円
②教室受講 ＋ ネット受講コース：10,000円（ネット受講のみの方もこのコースです）

〔神学館の3学期〕

1月7日 3学期授業開始
2月3日 2021年度入学試験
3月12日 終業日

※今年度は3年生不在のため卒業礼拝はありませんでした。

〔今後の予定（2021年度）〕

4月5日 入寮日
7日 11時 入学礼拝
13日 1学期授業開始

編集後記

毎回、余裕をもって編集を…と思うのですがやはり結局バタバタしてしまいます。とはいえ、なんとか神学館の「いま」と「これから」をお伝えできれば幸いです。2面は転載記事ですが、まさにその「いま」と「これから」の基調となっています。観想として私たちが〝リアル〟を見通すことができますように。人の世の困難とこのコロナ禍の只中で。（ゆ）